

# 明治初期 青森県弘前メソジストの 社会活動の興隆と試練

内海 健寿

はじめに

筆者が青森県弘前メソジスト教会史をとりあげた動機は、隅谷三喜男先生の古典的名著『近代日本の形成とキリスト教』<sup>1</sup>との出会いである。わたしは青森県弘前を中心とするメソジストのすばらしい社会活動に魅了された。

弘前教会は「半世紀間に神の御名のもとに受洗する者 1080 余名 しかも一身を神に捧げ教えを宣伝する者 100 有余名」<sup>2</sup>を輩出した。

旧幕藩体制が崩壊し、新時代が到来するとき、キリスト教が導入された。主の導きのもと、伝道者の人格的感化と福音を受容する社会層・人物が用意されるとき 伝道の社会的影響力は実に驚くべきものがあった。その歴史的事実を記述しようとする、この拙い小論が 今日、われわれに希望の光を示唆してくれることを念願するものである。

## 1 キリスト教の導入

明治維新後の日本において、最初にキリスト教徒となったのは、すぐれて士族階級であった。弘前においても士族がキリストの福音を受容したのである。彼らは市民社会建設の夢を抱き、当初から教会の自給独立を叫び、国民

---

<sup>1</sup> 隅谷三喜男『近代日本の形成とキリスト教』新教出版社 1950 年

<sup>2</sup> 高木武夫編『日本メソジスト弘前教会 50 年略史』1925 年緒言 3 頁

主義の旗を掲げたのであった。それは知識階級である彼らが、教会において指導的な地位に立ったことにもよるが、第三階級が幕末から維新にかけて地方都市に農村に、その姿を現していたことと深い関連をもっている<sup>3</sup>からではあるまいか。

封建的な束縛を廃止して近代的な農民、第三階級へと成長しようとする中農・富農・小地主層は、経済的、身分的な重圧を加えている半封建的体制を排除しようとし、一部のものは新たに入ってきたキリスト教に着目した。経済的な抑圧にも増して彼らを窒息させていた身分的隷属に対し、キリスト教は、四海同胞、士族も平民もおよそ人たる以上、神の前に価値の上下はないことを教えられたからである。農民層の指導者たちは熱心に道を求めた。<sup>4</sup>

明治 11 年の『七一雑報』によって青森県弘前を中心とした地方一円の状況を拾ってみよう。

「陸奥国弘前よりの手紙に、当地の景況はややよろしく、弘前中へ元寺町、土手町、こうぞ町の 3 か所へ講義所を設け、安息日、水曜日、金曜日の講義を開き、土手町は毎講義は 200～300 人、元寺町は 50～60 人、こうぞ町は 20 人、だんだん聴衆あり、これ、公会の兄弟は大いに奮発して、かわりがわり、講義をしており深く神に感謝している」<sup>5</sup>

「津軽弘前会では近ごろ婦女の集会を開いたところ婦人ばかりで集まるもの多く、なかなか盛会であった。」<sup>6</sup>

「3 月 16 日のことである。弘前教会員の本多齋氏は秋田県下羽後国大館におもむき、露会の山中氏（函館より派出した人で元会津出身の医学生であるが近年専ら伝道に尽力している）氏の旅館に講釈場を開いたところ、聴

---

<sup>3</sup> 隅谷『前掲書』22 頁

<sup>4</sup> 隅谷『同書』22 - 23 頁

<sup>5</sup> 『七一雑報』明治 11 年 1878 年 4 月 12 日号 3 の 15。『七一雑報』とは、キリスト教ジャーナリズムの先駆。神戸で発行された。アメリカン・ボードの宣教師ギューリックが中心となって、1875 年創刊。当初は文明開化の精神と西洋文物の紹介が主であった。しだいに教会の動静などの記事が多くなっていった。1883 年 6 月 26 日号で終刊。以後『福音新報』と改題。（日本キリスト教団神戸教会編『近代日本と神戸教会』創元社 1992 年 32 頁）

<sup>6</sup> 七一雑報 明治 11 年 5 月 10 日号 3-19

聞人およそ 430 名も来会があったので、2 人はこれに気を得て、盛んに福音を宣教しようとしている。」<sup>7</sup> (平易な文に直した)

「陸奥国中へは弘前会より説教所を設置して近ごろは弘前からわずかの距離にある黒石に 1 か所 また 青森港へも 2 か所設けて盛んに伝道に尽力しているという。内 1 か所は分営の通路である川堤際の須藤序という人の家屋を借り受けたという...いずれも聴聞人は 100 をもって数えるほどで景況は甚だよいという。しかし、伝道者のすくないのには困っているという。どの地方もそうだ」<sup>8</sup>

「弘前教会では近ごろの季会で脇山義保、古坂啓之助の両氏を地方伝道者に選んだという。また、来たる 7 月下旬から暑気のため、つねに業を執る書生も休暇であるから、その間、信者たちには、それぞれ方をもうけて近隣に出張伝道するため相談中であるという。弘前中では、ヤソ教は虚ではなく、実に真に導くものであるという。これは心得たる様子である」<sup>9</sup>

「青森に 3 か所、黒石に 1 か所の説教所を取り設けてから会員はすこぶる多忙となった。本多庸一氏は、近来、東奥義塾の塾長になったので、内外きわめて繁務となったので、伝道志願者の脇山、古坂の 2 氏は言うまでもなく会員は大半は義塾の学生であり、彼らも学課は多忙であるが、つねに山河を踏破して伝道に尽力するは実に感心である。聖書売り広めながら伝道をして、青森県ならびに秋田と盛岡の両県下へも時々派出している本多齋氏(本多庸一の弟)はこのたび専ら伝道のみ尽力することになって、近く青森へ出張することになった」<sup>10</sup>

このような報告は数多くあるが、徳川幕府以来のきりしたん邪宗門政策によって押しつけられていた梁木が眼から落ちたとき、農民たちは熱心に福音を求めたのである。

『日本メソジスト弘前教会 50 年略史』は、次のように報じている。「(明治 11 年) 5 月◆日 田中五郎 本多齋 古坂啓之助 山鹿旗之進 米国伝道

<sup>7</sup> 同 明治 11 年 5 月 31 日号 3-22

<sup>8</sup> 同 明治 11 年 7 月 5 日号 3-22

<sup>9</sup> 同 明治 11 年 7 月 12 日号 3-28

<sup>10</sup> 同 明治 11 年 9 月 20 日号 3-38

師 デビソン氏は、黒石に来て聖書の講義を開いた。これはこの地において、初めて光を輝かした...聴衆には農工商 小学校教師すべて 200 有余人あった」<sup>11</sup>

全国的にみて、キリスト教が上昇を指向する上層農民を基盤として農村に進展しはじめた。<sup>12</sup> といえよう。地方都市の小ブルジョアジーの勢力はなお微弱であったが、彼らは、封建的な束縛を根源から排除して市民的な自由の上に発展を求めた。彼ら中のあるものは、この自由の基礎としてキリスト教を求めた。<sup>13</sup>

このように明治初年は、日本全国都市に農村に、第三階級の芽が発生した時期であり、封建的束縛を破って、近代日本市民社会の形成を要望する動きがみられた。彼らは、彼らのエネルギーの発散を心の内部から強め支えてくれるものとして、キリスト教を求めたのであり、キリスト教は、彼らに新しい人生と新しい世界とを展開してくれたのである。<sup>14</sup>

## 2 国民主義 教会の自給独立

初期のキリスト者たちにおいては、新日本市民社会の建設と人格神に根ざす市民倫理とは、相いがあって、独自の国民主義を形成していた。この国民主義こそは欧米近代市民の戦闘の旗印であり、日本のキリスト教徒も近代市民社会形成の戦いに、キリスト教倫理の旗を掲げて参与したのであった。<sup>15</sup>

初代信徒の国民主義は、教会にあっては、その自給独立論となった。青森県弘前に明治初年キリスト教が導入されたときの状況は、決して平穏なものではなく、次に見るような周囲の反対が強かったのである。

『弘前メソジスト教会 50 年略史』によれば、「弘前の地にキリスト教の

---

<sup>11</sup> 高木編『50年略史』 8頁

<sup>12</sup> 隅谷「新しい教えを信じた人たち」小川けい治編著『日本人とキリスト教』三省堂 1973年 18頁

<sup>13</sup> 隅谷『前掲書』 24頁

<sup>14</sup> 隅谷『同書』 24 - 25頁

<sup>15</sup> 隅谷『同書』 19頁

入りしは、明治 5、6 年ころで当時は維新の大業成ってわずかに数年にすぎなかったため、キリスト教に対する理解は毛頭なく、キリスト教を邪宗門と呼び、天下を乱すものと見なし、東奥辺地なる弘前に住んでいる多くの頑迷の徒は、これを排滅しようと努めたのである。本多庸一氏が東奥義塾の長となり、東奥の民の指導者となってからは、その反対の声は、ますます迫害の手と共にはげしく、ついにある学生信徒のごときは、父に刃をもって脅かされ、あるいは、義塾への通学を禁ぜられ、あるいは勘当され、そのうえこの地より追放される者さえ出たのである。」<sup>16</sup>

このような当時の困難な状況下にあつて、四圍皆敵、孤立無援であり、教師としては宣教師以外にない当時にあつて、信徒をして、自給独立を叫ばしめたものは、彼らの立っていた国民主義に外ならなかったのである。<sup>17</sup>

小崎弘道は日本の教会を清国（現中国）の教会と比較して論評した。清国では宣教 100 年の久しいにもかかわらず、また信徒も 20 余万の多きにたつたのに、その教会は依然として宣教師の教会であつて、いまだ清国の教会となっていない。それは清国では、自給独立の教会がすくないだけでなく、教会の政治もまだ清国の掌中に帰していない<sup>18</sup> からである。と鋭く考察した。

自給独立を叫ばしめたものは、近代的国民主義の成長であり、国民主義の成長の社会的、経済的基盤は、「第三階級」すなわち、近代市民階級の勃興ではあるまいか。幕末維新において、日本には、地方都市に農村に、第三階級が、じょじょにその姿を歴史の舞台の上に現していたと見られよう。このような歴史的背景に立って東奥弘前においても、彼らの自給独立の国民主義の旗は掲げられたのであつた。

弘前教会においてその実例をあげると次のとおりである。

菊池九郎はつとにキリスト教を信じ信徒のために自宅を集会所に供してその発達を助け、明治 10 年受洗して、キリスト教をもって道徳の基礎とし

---

<sup>16</sup> 『50 年略史』 緒言 2 - 3 頁

<sup>17</sup> 隅谷 『同書』 20 頁

<sup>18</sup> 隅谷 『同書』 21 - 22 頁

た。<sup>19</sup> 菊池先生は「よしキリスト教は世界的なるにせよ、日本の信徒が日本の教会を維持するのは、もとより当然の義務で海外教友の好意は謝すべきも、その補助金のごときは断じてこれを謝絶すべし、との意見であった」<sup>20</sup> このように弘前教会においては、教会の自給独立の精神が強かった。

弘前教会記録『公会記事』明治 12 年 12 月 17 日 会友菊池氏宅に会して将来の教会振起策を議論した。近来、信徒の気力が衰えた原因を考えるに、それはアメリカ伝道会社の援助を受けて、これに依存して自治の精神が乏しいところによる。と反省した。その結果「翌 13 年 1 月より断然アメリカ伝道会社の補助金を仰がず、自給自治の精神をもって伝道することに決した」<sup>21</sup>

菊池九郎の弟 菊池軍之助は、明治 8 年アメリカ・メソジスト宣教師ジョン・イングより受洗し、キリスト教を奉じて翌年上京し、津田仙について農学を学び、奮然志を立て、明治 10 年 1 2 月、珍田 佐藤 川村と共に渡米し、農学を専攻したが、用役され、学資を自給して刻苦勉励し、遂に病にかかって、同 11 年グリーン・カッスル留学中、客死した。25 歳の若さであった。<sup>22</sup>

菊池軍之助ら 14 名の士族は、明治 8 年イングより受洗した。彼らはキリスト教による近代日本の建設をめざして信仰に入った。彼ら青年のめざした新日本は維新によって否定された封建日本でもなく、明治新政府によって意図された絶対主義日本とも異なる「近代市民的」なものであった。<sup>23</sup> 菊池軍之助は、おそらく、農業における近代的経営をめざして、農学を専攻するために、津田仙について学んだ。津田仙（津田英学塾の津田梅子の父）は幕末に欧米を視察し、帰国して明治 8 年学農社を設け、農業における資本主義的発達を企図した、キリスト教文明開化論者であった。<sup>24</sup> 軍之助はアメリカの資本主義的農業経営を学ぶ意欲をもって自給独立の生活を守ったのではな

---

<sup>19</sup> 長谷川虎次郎編『菊池九郎先生小伝』東奥義塾 1935 年 138 - 139 頁

<sup>20</sup> 長谷川編『同書』143 頁

<sup>21</sup> 中田久吉『弘前美以教会略歴史』明治 33 年 9 頁。山鹿旗之進『公会記事』（明治 8 年 6 月 6 日～同 20 年 2 月 26 日）東京神学大学図書館 63 頁。長谷川編『菊池九郎先生小伝』144 頁

<sup>22</sup> 『菊池九郎先生小伝』142 頁 『50 年略史』27 - 28 頁「菊池軍之助追悼碑」を見よ。

<sup>23</sup> 隅谷『前掲書』19 - 20 頁

<sup>24</sup> 比屋根安定編『新・キリスト教辞典』誠信書房 1965 年 241 頁

いだろうか。

弘前教会は、横浜バンドの同公会の分会であったが、のちメソジストへ転会したので、横浜公会から贈られた祝金の金 200 円を返却した。<sup>25</sup>

弘前教会出身のメソジスト伝道者・白土八郎は、「日本のキリスト教化」のなかで、自給独立を強調して、「日本の教化は日本人の責任であり、また、使命である」<sup>26</sup> と力説している。

東南アジアや清国と明白に異なって、日本の教会に、積極的な自給独立論が行われたことは、初代信徒の国民主義の現れであり、それは、封建制度や絶対主義を克服して、近代市民社会の形成を推進しようとする第三階級が、当時、地方都市 農村に胎動しつつあったことを物語るのではあるまいか。

### 3 四民平等主義

明治初期のキリスト者の特質は、人格の発見による新しい倫理主義であった。この倫理主義は、封建的 身分的主従関係の倫理を否定し、男女 士族 平民 すべて平等な市民社会を建設しようとした。キリスト教徒たちは、それを神の前に四民の平等を教えるキリスト教の中に発見したのである。<sup>27</sup>

市民社会の倫理を追求したメソジストは、明治初期の弘前教会を中心として、どのような具体的な社会活動を展開したであろうか。以下それを見よう。

弘前教会の初代信徒 山鹿旗之進は、純真なキリスト教の「国益」を越えた、超国家的 超民族的 世界的 隣人愛の生き生きとした祈りに接して、心に深い感動を覚えた。

「ある日曜日のこと いつものように、イング先生は、閉会前にひざまずいて祈とうを捧げた。そのときの祈とうは声涙ともにくだり、以心伝心とでも言おうか、言語に超越して列席者一同を感動させた。その祈とうは日本帝国のためと私ども塾生のために、とであった。従来 なんらの縁故もない

---

<sup>25</sup> 『弘前教会 50 年略史』 277 - 278 頁

<sup>26</sup> 『同書』 239 - 240 頁

<sup>27</sup> 隅谷 『前掲書』 18 - 19 頁 新約聖書 ガラテヤ人への手紙 第 3 章 28 節を見よ

しかも 一時雇いの外国人でありながら、これほどまでに熱誠をこめて、われらのために上帝（神）に祈ってくれるとは、これ決して尋常一様のことではあるまい」<sup>28</sup>

新内岩太郎は、キリスト教倫理の四民平等主義に心を強くひきつけられた。「藩政時代の役人は今よりは一層横柄で空威張りして、下役を見ること牛馬もただならず、いかにもしてこの束縛を脱したいと思うおりから、西洋の聖書は、神は人の上に人を造らず、天下は天下の天下であって、四民平等であることを教えるものである とのことを聞いてから、これを学ぶなら、その圧迫を脱して慰安を得るであろう。」<sup>29</sup> との希望をもってキリスト教に接近したのである。

弘前教会のキリスト教徒は未解放部落に接近していった。『公会記事』明治 10 年 12 月 8 日 第 2 安息 「今晚より元エタ（未解放部落）町に夜講を開く、過日より長谷川 山田の 2 氏勧めの結果による。山田 脇山 本多の 3 人講義した。」<sup>30</sup>

東奥義塾教師で弘前教会の仮牧師ジョン・イングは母国への手紙に未解放部落への伝道を次のように書き送った。「エタの伝道につき、いささか申しのべなければならぬことがあります。この最下民の住居する区域を、こうぞ町と言います。その広さより推測すれば、やく 2000 人くらいもいるかと思われます。前週の日曜日の夜 私は本多 山田源次郎およびその他の者とかうぞ町の説教所に行きました。この所はエタ頭の 1 人と懇意な山口兄が巧妙な斡旋によって借りることができました。その聴衆数は男女と小児とをあわせて約 50 名ほどで日暮れころより集まり、いずれも讚美歌に耳を傾け説教を聴聞しました。その聴衆のうちには、重立った者もおりましたが、みんな喜んで聞きましたようです。本多 菊池の両兄が久しく熟考していたように、私も早速この階級民のために学校設立のことを考えております。」<sup>31</sup>

<sup>28</sup> 山鹿旗之進「信仰生活第一歩」『日本伝道めぐみのあと』 87 頁

<sup>29</sup> 『弘前新聞』 明治 44 年 10 月

<sup>30</sup> 山鹿旗之進『公会記事』（明治 8 年 6 月 6 日～同 20 年 2 月 26 日）東京神学大学図書館 48 ページ 中田久吉『前掲書』7 頁

<sup>31</sup> Ing の書簡 明治 10 年 12 月 26 日 Missions and Missionaries of M.E.C. 山鹿旗之進



「本多 菊池両先生等は、ただそこに伝道するばかりではなく、つとに学校を設立してそれら子弟をも世間並みに教育を受けられるようにと計画された。けれども時勢が早すぎたので、いろんな偏見故障のために成就しなかったらしい。<sup>32</sup> 彼らは「万人みな神の子としての平等觀を徹底させようとしたのであろう。」<sup>33</sup>

未解放部落の人びとは、明治初年のエタ解放令によって新平民と呼ばれたとはいえ、その後も實質的には一般市民としての交際は拒否されていた。このような人びとの中にキリスト者土族が入って行き、進んで隣人として愛の手をさしのべたことは、まさに画期的意味をもった。<sup>34</sup>

商家の徒弟階級への信徒の接近も注目されなければならない。

「土手町に商家の徒弟階級のもの20名が夜学校を開き、本多 脇山その他学校の諸氏に援助してくれるように願い出た。このようにして旧来の階級的画線は取り除かれている。」<sup>35</sup> 初代キリスト者たちは、新たに、土農工商の身分的差別の背後に、国民を、近代市民を見出したのである。

弘前教会牧師・本多庸一は、「万人みな神の子にして四海同胞である」との信条をもって生活を貫いた。彼の四海同胞主義は、排他的にして偏狹的な地域セクト主義を打ち破り、隣人愛を浸透させて、近代的市民倫理を実践したのであった。「当時は同じ青森県人でも、南部と津軽とは、古来歴史的関係から仲が悪かった。平素から敵愾心を深く養成したから、津軽では、かわいい一人子は南部に旅させるな、と言うほどであった。その両者の感情は、あたかも、ユダヤ人とサマリア人のそれのごとくであったろうか。ところがそのころ、岩手県遠野の土族で、脇山義保という人が警部として弘前に来任した。この人は東奥義塾に入学して、半ば教え、半ば学んでいた。本多先生はこの南部ものの若夫婦を、自分の家に引き取って同居させた。そして兩人を家族のように、なんのへだてもなく親切に待遇した。そこで脇山氏夫婦は、

---

抄訳（『50年略史』303 - 304頁）

<sup>32</sup> 山鹿旗之進「信仰生活の第一歩」『日本伝道めぐみのあと』93ページ

<sup>33</sup> 岡田哲蔵『本多庸一伝』日独書院 昭和10年 59頁

<sup>34</sup> 隅谷三喜男『日本社会とキリスト教』東大新書 1954初版 1968年8刷 66 - 67頁 工藤英一『社会運動とキリスト教』日本YMCA同盟出版部 1972年 80 - 81頁

<sup>35</sup> Ingの書簡 『50年略史』304頁

先生の自分たちに対する好意を感謝するばかりでなく、同時に先生夫婦の間柄の麗しきに感服した脇山氏は、先生の家庭をとうして感化された。」<sup>36</sup>

初期キリスト教徒の偉大な事業のひとつは、伝統的 封建的 身分的地縁 血縁的結合に基礎をおく旧い社会を否定して、これに対して、近代的市民倫理的な生活共同体を建設した点にある。<sup>37</sup> 伝統的社会が崩壊して、人間関係がこれから解放されたところに、真に近代的 人格倫理的な社会関係を成立させようとして、初代キリスト教徒たちは奮闘したのであった。

#### 4 メソヂストの社会活動

彼らが福音を信じたとき、彼らはこれまで知らなかった新しい世界に自己を見出した。道徳といえば、忠孝のような封建的階層制を基礎とする社会の秩序を維持する社会規範にすぎなかったところに、見えないところで人びとを凝視している正義と仁愛の神に対する信仰は、倫理を深く内面からの要請とし、人格に対する尊厳が深く教えられ、この新しい発見を、いかにもして国民に伝えたいとの要望は帰せずして各人の胸底に生まれた 彼らが知った世界は、人の心がこれまで思わなかったところであり、当時の日本の社会一般との間には甚だしい質的相違が存した。この落差から生ずるエネルギーは猛烈な伝道活動となった。したがって当時は信者1人1人に伝道の精神がもえていた。<sup>38</sup>

したがって彼らの活動は小都市の狭い枠内に限られるものではなかった。県下の各地に及び、小中都市を中心に広汎な広がりをもっていた。伝道の範囲は、士族社会からその周辺の農民社会へと広がっていったのである。『弘前教会 50 年史』は当時の信徒の伝道活動の様子を次のように記している。

「当時、学生信徒は、受洗すれば必ず伝道しなければならなかった。だから彼らは三々五々に連れ立って、定日、弘前付近 中郡、熊島、悪戸、浜町 はもちろん、定日に黒石に出張した。黒石町前町鳴海旅館を借り受け、これを講義所と

---

<sup>36</sup> 『50 年略史』 269 頁

<sup>37</sup> 隅谷 『日本社会とキリスト教』 56 頁

<sup>38</sup> 隅谷 『近代日本の形成とキリスト教』 29 頁

した。学生等は3里の道を徒歩で往還するをつねとした。」<sup>39</sup>

弘前教会は明治8年 本多庸一を中心として教会形成がなされた。弘前教会を中心として、青森伝道は11年に開始され、17年教会が形成された。黒石は11年伝道開始され、16年講義所が造られた。藤崎は13年伝道が開始され、19年講義所となり、24年教会となった。五所河原は21年伝道開始され、24年講義所となり、26年教会が形成された。<sup>40</sup>

国会開設の請願が菊池九郎 本多庸一 服部尚義 今宗蔵 田中、伴野 外崎の面々により東奥義塾の講堂で協議されたのが原動力となり、各郡町村にその趣旨を発表し政談演説が行われ、本多は伴野と共に上京し天下の傑士と連結して国会開設運動を起こす。義塾の教師 学生は地方町村自治体の設立・改良に意を注ぎ議事法など互いに研究して、県会、町村会開かれるとき、義塾出身者は、県会・町村会の議長・議員となり先覚者として大いに地方自治のために貢献した。<sup>41</sup>

### 軍人伝道

青森伝道の楽しみを分かちたい。元来いずこでも軍人兵士というものは、みな狂暴無頼のものと思っていたが、どうしてどうして、当青森の営所には泥中の蓮花とも言うべき神の恵みをこうむる、いともやさしき兵卒があった。実に感謝に堪えない。神の栄光を誉めたたえたい。兵営の中に道の入った元を尋ねると、大久保某(当県八戸産で、その地で行われているギリシャ正教をすこし聞いた人)という人があった。彼は兵中にも正しい人でしきりにヤソ教の美を称賛して人びとにすすめる親切な人であったから、昨日の狂暴者も今日は慈善の人に化するものもすくなくない。<sup>42</sup>

函館メソジストのダビソン氏は去月上旬、弘前 黒石 青森辺に伝道されたが、どの地も集まるもの多かった。青森には当時、本多斎氏が出張して尽力しており、

---

<sup>39</sup> 『50年略史』8頁

<sup>40</sup> 隅谷三喜男教授「日本キリスト教史(弘前)ノート」貴重なノートを快く筆者に貸与されたご好意に感謝する。

<sup>41</sup> 東奥学友会編 『東奥義塾再興10年史』1931年 37頁

<sup>42</sup> 七一雑報 明治12年8月1日 4-31

青森分営の兵卒で熱心の者 7~8 人もあり、市中の者もおいおい耳を傾けるようになった。<sup>43</sup>

### 監獄署教誨・囚人伝道

青森の監獄署教誨へ 当春、両度ほど弘前東奥義塾の本多庸一氏が勧められたが、囚人も大いに感銘した模様であったが、その後、ゆえありて真宗僧侶に依頼し、両度ほど講義したところが、以外に囚徒の心を損ない、やや反動の勢いがあった。時に署長石川慶吾氏は聖教を愛する人であったので実況にもとづいて、県令に具申し、さらに本多庸一氏に教誨を依頼するようになった。本多氏は同県会の常置委員で、毎月青森へ出張のつど出署講義をされ、その余は中田久吉氏(中田重治の兄)が代理担任されることとなった。<sup>44</sup>

### 劇場でキリスト教演説会

明治 16 年 8 月ころより中田久吉氏、当地に来て伝道したところ、...聴衆もつねに 50 余名あり、道を求める者続々これあり、実に喜悅している。昨年受洗者 1 名、洗礼を願う者 4~5 名あり、...23 日夜、亀谷座という劇場で、弘前 黒石等の兄弟と共にキリスト教演説会を開いた。ひきつづく春雨にも関わらず、200 余名の聴衆あり。たいいてい謹聴の有様であった。<sup>45</sup>

### キリスト教と仏教との討論会

明治 17 年ころ破邪顕正仏教演説会という名称で各地方に演説が試みられた。当時、弘前市川端町の劇場弘栄座で松岡某が演説会を公開した。当時、義塾の学生中にはキリスト信徒もあって多数演説傍聴に出かけた。その演説中、藤崎の信徒学生の清水泰二郎氏が質問して、さんざん松岡氏から論難された。その時 藤田ただす氏は聴くに忍びず、清水氏を応援するため、藤田氏は質問を発した。このことは、遂に仏や討論の問題となり、弘前市民は一般にこれを知るようになり、好奇心を抱き、あるものは仏やいづれが優るか等考えを抱くようになった。劇場

---

<sup>43</sup> 同 明治 12 年 12 月 5 日 4-49

<sup>44</sup> キリスト教新聞 明治 16 年 10 月 19 日 東の 10

<sup>45</sup> 同 明治 17 年 5 月 9 日 東の 39

は満員となった。一夜一夜ごとに聴衆は増加し、藤田ただす氏は正々堂々、独一神教を主張し、松岡氏をして顔色なからしめた。<sup>46</sup>

### 藤崎教会

藤崎への伝道活動の発端を『青森県総覧』は次のように記した。「明治 13 年ころか、時は国会開設の国論が高まり、この請願を有志に求めようと本多庸一 菊池九郎氏の運動となり、政談演説会は数回にわたって当地に開かれた。政談演説会の時は多数の来聴者があるが、キリスト教講演のときは聴衆はきわめてすくなかった」<sup>47</sup>

当時、民権運動がキリスト教に好意をもち、キリスト教徒が自由民権を支持したことは全国的に指摘されるところであるが、国会開設の請願運動の進展の中において、政談演説会に兼ねてキリスト教の導入が、藤崎村になされたのであった。藤崎の 300 町歩以上の大地主といわれた佐藤勝三郎氏も入信した。彼の「略歴遺言」によれば、「明治 13 年のころより、古坂啓之助 本多庸一 珍田捨己の諸氏しばしば来藤、政談演説会に兼ねてキリスト教を宣伝した。その教えを聞き深く感じるところあり、同 17 年 6 月になり、弘前教会で、藤田溪疑（医師） 本多末四郎 自分（佐藤勝三郎）3 人で決心して、キリストに心霊を委ね、洗礼を受けた。それ以来、大なる迫害をうけたこと、数え上げる時もないほどだったが、ひきつづき、妻なか、清水理兵衛 長谷川誠三郎 等と受洗した。この間に妻の内助の功多大であった。これよりすべて迫害も攻撃も物ともせず、讚美歌を歌いつつ確信をもって進んできた。」<sup>48</sup>

「その後 19 年まで集会場を佐藤勝三郎宅となし、珍田捨己氏も来援し、キリスト教と政談をまじえて語り聴衆を集めた。諸氏の赤誠よりキリスト教の伝道功を奏し、毎日曜日朝は 10 数名が隊をなして弘前教会に行き礼拝を守り、夜は佐藤氏宅で伝道会を開いた。藤崎小学校の学務委員であった佐藤勝三郎氏は清水滝次郎氏と相談し、青森浦町小学校長の沢井弘之助氏（会津人）を藤崎小学校長に招き、明治 18 年来任、教育に従事しつつ聖書講義をなし、当村にキリスト教宣教に多大の貢

---

<sup>46</sup> 『50 年略史』 12 ページ

<sup>47</sup> 東奥日報社 『青森県総覧』 昭和 3 年

<sup>48</sup> 佐藤勝三郎 「明治 9 年一家創立以来略歴遺言」（昭和 2 年 10 月） 隅谷「ノート」

献をなした。」<sup>49</sup>

弘前メソジスト教会が伝道した近郊の藤崎では、明治 10 年代から 20 年代にかけて、農民および地方ブルジョアの成長が漸次展開し、地主、呉服商人などの上層農民と商人を中心にキリスト教が受容され、医師、村長、郵便局長、教師、小学校長など社会的上層階級がキリスト教を支持したのであった。

この段階において、キリスト教が社会の発展を担う中上層農民および地方中小ブルジョアと歩んだ限りにおいては、迫害 圧迫の中にあっても、なお、社会的活動力を失うことはなかった。<sup>50</sup>

「同 18 年当村の人びとで弘前教会で受洗した人は 10 名の多きに達し、…会堂建築の議おこり、20 年佐藤氏寄付の土地に新築着手、落成、献堂式をあげた。当時受洗した長谷川誠三氏は、多年の家業であった酒造業を信仰の故に断然として全廃し、味噌醤油の製造業に転じた。このころより平ぜいキリスト教に反目する人びとの迫害いよいよ甚だしく教会堂または信徒の住宅がいたずらを受けたが、その迫害により信徒の熱心もまた加わり、洗礼を受ける者その数を加えた」。<sup>51</sup>

10 年代の発展期に地方の都市および農村に教会、講義所が建設されるにつれて、従来、教会の中で中心を占めてきた土族のほかに、小資本家、中富農家等がそれらの教会の中で重要な役割を演ずるようになった。当時の有力な教会員の中に、自由民権運動において活動した「酒屋」を家業とする者が数多く見出される。<sup>52</sup>

たとえば、「弘前の近郊 藤崎教会の柱石であった佐藤家も元は酒屋であった。上州安中の湯浅治郎も醸造業者であった。岡山県高梁教会の柴原宗助も醸造業者であり、県会議員であり、信者となってその業を廃した。」<sup>53</sup> 彼らがキリスト教の中において見出した清新な世界こそ、封建日本を超えて彼らの社会的・経済的な上昇を可能にする、まさに建設されるべき社会の基礎であると考えられた。当時の日本の小ブルジョアとピューリタンとの親近性を知ることができる。<sup>54</sup>

---

<sup>49</sup> 東奥日報社 『青森県総覧』

<sup>50</sup> 隅谷 『近代日本の形成とキリスト教』 112 頁

<sup>51</sup> 東奥日報社 『青森県総覧』

<sup>52</sup> 隅谷 『前掲書』 65 - 66 頁

<sup>53</sup> 隅谷 『同書』 65 頁

<sup>54</sup> 隅谷 『同書』 66、68 頁

### 藤崎りんご園 敬業社

弘前における野外りんご園の創始者・敬業社について『日本農業発達史』は、こう論評している。「地主層は弘前土族の苗木業者を先導として、小規模なりんご栽培に乗り出したが、これらの土族および地主のなかには、すでに欧化思想の共鳴者があり、政治的には自由民権の立場をとり、宗教的にはキリスト教を、経済的には殖産興業の実践に踏み出そうとするグループが発生した。これが東奥義塾塾頭の菊池九郎を中心とする一派で、りんご園経営が資本家的な農業経営の形をもって始められたのである。」<sup>55</sup>

敬業社の最高株主の長谷川誠三は、「当時の地主層の典型的な企業家的性格をあらわしている。彼は明治 20 年藤崎メソジスト教会の落成に際し受洗し、産業投資に主力を向け、銀行、畜産、鉱山、倉庫、等の金融ならびに産業資本家として成長してゆくのであった。」<sup>56</sup>

### 山鹿元次郎 (1858 - 1947) の投獄・献身

青森新聞・青森新報記者 旧弘前藩士 東奥義塾教師の山鹿は、青森で 16 年夏より中田久吉牧師について信仰を養いつつ新聞事業に関係、ある記事が条例に触れ彼は軽禁錮刑、彼はその時を反省 改悛の時として、聖書を通読し神と交わる祈りの所とし、伝道界に出る決意の機会とした。<sup>57</sup> 18 年 1 月 山鹿が 7 か月獄舎にいたとき、本多庸一は青森刑務所に彼を訪ねて慰め激励した。「本多先生は自分を刑務所に訪ね、温情あふれる慰め励ましてくださった。この深い恩寵を忘れることはできない。自分はこれによって更生し、信仰を新たにし、献身して伝道者となる決意をした。」(宮崎繁一「山鹿元次郎先生の思いで」)

「筆禍事件で入獄中、人間を罪悪より救助するの道は信仰にあると痛感して牧師となり」<sup>58</sup>

### 明治初期 青森県に活躍した民権派言論人への弾圧

---

<sup>55</sup> 東畑精一 盛永監修 農業発達史調査会編 『日本農業発達史』第 5 巻 中央公論社 昭和 30 年 449 頁

<sup>56</sup> 『同書』第 5 巻 451 ページ

<sup>57</sup> 『弘前新聞』昭和 10 年 9 月 22 日 古田十郎 『山鹿元次郎小伝』昭和 41 年 53 頁

小川渉（1843 - 1907）（天保 14 年 - 明治 40 年）

彼は青森新聞・青森新報に執筆し県政批判で筆禍にかかり、罰金・禁錮となる。  
『会津藩教育考』（明治 32 年）の編著者<sup>59</sup>

本多庸一は、伊藤、小川渉、一馬の入獄に際して、「古人、惨酷の法律書をもって血書の冊という。余、今朝、血に類する朱をもって返簡を草するは微意あり、諸兄、獄中、聖經をとらば血の必要なるを知らん」小川は獄中、血の書、聖書を読み、後、青森教会でキリストの血にあずかり、受洗、好める酒を断ち、長崎で教育の業につとめ、著述に専心した。その嗣子、かんぞうは、メソジスト教会の牧師となる。<sup>60</sup>

小川かんぞうは、社会民衆党仙台支部長、農民組合宮城県支部長のち松沢教会名誉牧師<sup>61</sup>

#### 青森県弘前教会受洗者数の年次的推移（『弘前教会 50 年略史』より作成）

弘前を中心とするメソジスト教会においては、明治 10 年代に農民および地方ブルジョアの成長は、未成熟であり、20 年代に上からの資本主義の制覇が十分に浸透せず、30 年代になって始めてその展開をみたが、最初の危機が 39 年～40 年代に出現した。危機以後のキリスト教会の沈退の重要な要因は、「日本的資本主義」の発展であり、これは、その後の教会発展にも重大な影響を与えるのである。<sup>62</sup>

「明治中期、日本型資本主義の確立と共に、近代市民社会倫理の基礎としてのプロテスタンティズムは、日本社会と異質的なものとして位置づけられた。ここに日本プロテスタント教会の悲劇が存する。」<sup>63</sup>

---

<sup>58</sup> 伊藤徳一 『東奥日報と明治時代』 東奥日報社 1958 年 20 頁

<sup>59</sup> 伊藤徳一 『同書』 22 - 25 頁

<sup>60</sup> 古田十郎 『前掲書』 52 頁

<sup>61</sup> 小川かんぞう 『清教徒精神』 キリスト新聞社 1964 年 197 頁

<sup>62</sup> 隅谷 『近代日本の形成とキリスト教』 121、112 頁

<sup>63</sup> 隅谷 『同書』 43 頁



おわりに

本稿は、筆者の論文「青森県における近代社会の形成とキリスト教 明治初期の弘前メソジスト教会史を中心として」(会津短期大学学报 第31号 1973年 15 - 30頁)を基調として執筆した。

メソジスト監督本多庸一は、横浜のブラウン塾で入信した。弘前メソジスト出身の伝道者たちは、その横浜において、よい働きをした。弘前メソジストの平田平三牧師は、山手通りの近くにあるスラム街をバンペテン女史(横浜山手のメソジスト伝道聖経女学校長として来日した)、稲垣寿恵子、二宮とともに視察し、窮民救助のために、施療所、施米、就労斡旋所等の事業を開始した。<sup>64</sup>

プロテスタント孤児養育の先駆者の医師・佐竹音次郎は、1869年(明治29年)に鎌倉保育園を始めた。佐竹は、鎌倉で山鹿旗之進(弘前メソジスト)から受洗した。<sup>65</sup>

(会津大学短期大学部名誉教授)

---

<sup>64</sup> 横浜プロテスタント史研究会編『図説横浜キリスト教文化史』有隣堂 1992年 133頁

<sup>65</sup> 『同書』 132頁